

古河城主 土井利位の愛用した雪華文（もん）の佩刀（はいとう）

刀 銘：應古河侯命固山宗次作之

（こがこうのめいにおうじて こやまむねつぐこれをつくる）

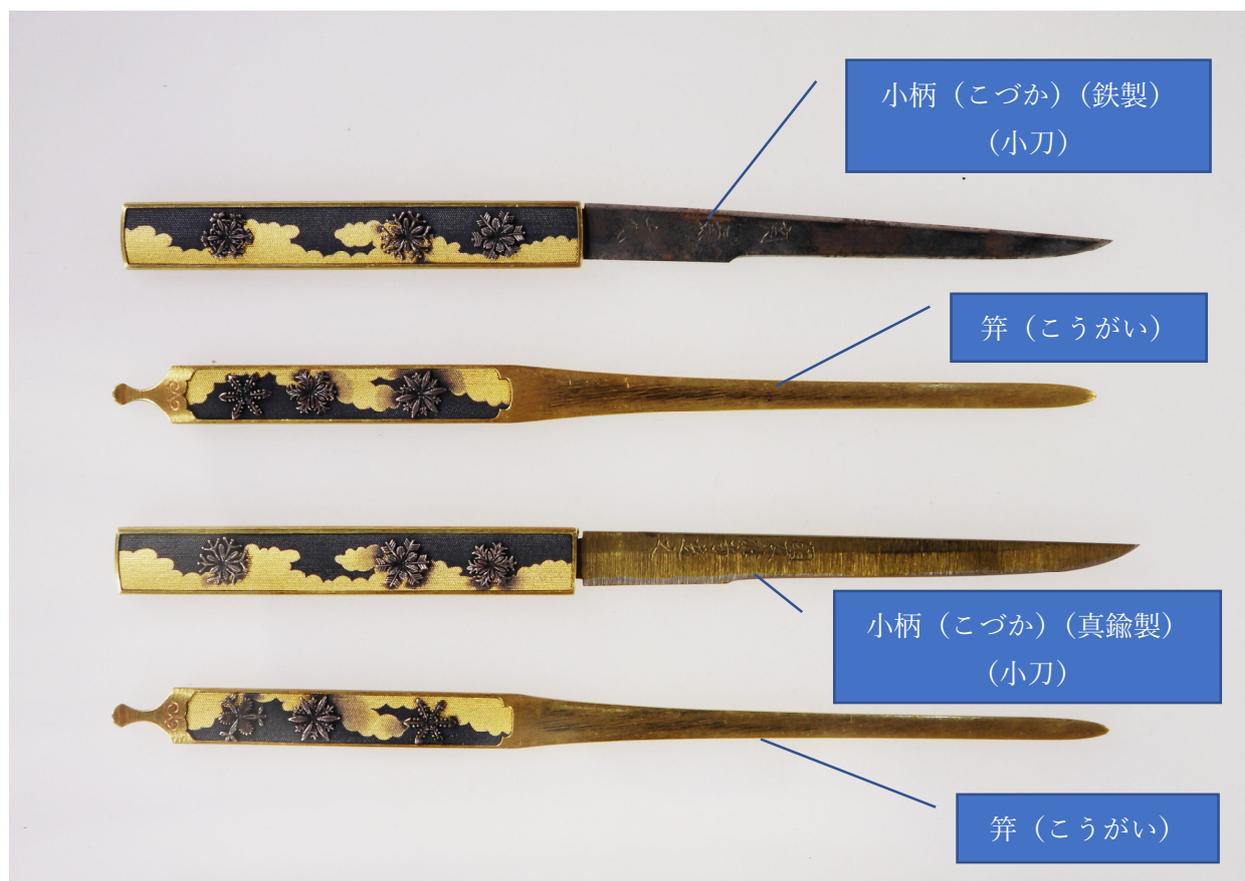
梅花皮鞘黒研出大小拵

（かいらぎざや くろときだし だいしょうこしらえ）

大小2口 刀装具全体像《鐔（つば）・鞘（さや）・柄（つか）》



刀装具《筭（こうがい）・小柄（こづか）》



刀装具《柄頭 (つかがしら)》



刀装具《柄 (つか)》



刀装具《鐔 (つば)》



【解説】

本品は、政治家として実績を重ねて幕府老中首座にまで上り詰めた人物「土井利位」が自らの刀として特別に指示し製作させた愛刀で、古河藩刀工 固山宗次が鍛えた大小2点。

古河藩ゆかりの刀工製作のものとして貴重であるが、本品最大の特徴は、刀装具(鐔(つば)・鞘(さや)・柄(つか)・小柄(こづか)・筭(こうがい)など)に利位の観察した雪華図がふんだんに取り入れられていることである。

これらは、利位が関与して成立したもので、その完成度の高さという点からも貴重な美術工芸品であり、利位と雪華図という古河市の歴史を象徴する唯一無二の存在である。

【土井利位関連文化遺産】

利位は、刀装具、馬具や染織品、唐紙や書状、押し菓子型の型枠などに雪華文を取り入れて、多くの美術工芸品のデザインとして雪華文を活用していたことが知られている。しかし、それらのほとんどが散逸しており、現在古河歴史博物館に伝えられているものは、鷹見泉石関係資料に伝来する雪華模様を料紙に散らせた書状が存在するのみである。

利位のプロデュースによる雪華模様という意匠を用いた美術工芸品は、現状では本品が唯一存在を確認することができるものであり、他に類例がないものといえる。

なお、利位の官職名から「大炊模様(おおいもよう)」と称され江戸で大流行した雪華模様は、その後も連綿と続くニューモードとなったため、利位の業績は、美術史研究者のあいだでも高く評価されている。

また、本刀剣に附帯している小柄の刃については、1本は鉄製、もう1本は真鍮製でできている。殊に真鍮製の小刃は、日本のダヴィンチと称される発明家の国友一貫齋能当(くにともいっかんさいのうとう)が製作したもの。国重要文化財に指定されている国友一貫齋資料にも記録があるものの、現存は本品のみで他に例がない。この刀剣に関しては利位の嗜好がよく反映されているものとしても貴重である。